

「現地を訪問して想うこと」

1979年 法学部卒業  
倉谷 昌克

11月23～24日の福島県会津コースに参加させて頂きました。まずもってこのような機会を与えて頂いた母校校友会に感謝いたします。

さて昨年参加させて頂いた宮城県コースは、災害の爪あとをひとつひとつなぞるように、実際に起きた事を確かめるような作業でしたが、少なくとも破壊されつくしたのちこれ以上は悪くはならない、今がどん底でこれから復興上昇していくんだというようにとることもできました。それに対して今年の福島会津コースでは、目に見える被害を受けたところは訪問先にはなく、見た目は静かな今までどおりの表情を見せていました。しかし福島の抱えている問題は将来に対する不安であり、他県の被害とは違ったものでした。福島県校友会馬場幹事長が言っておられた「家族のために福島を出て行く人がいるが、彼らを責める事はできない。何がおきているのか、何が正しいのか誰もわからないからである」まさしくこれが現在進行中の災害の実態なのです。

私は昨年このレポートで、現状打開には中央の強力なリーダーシップで先端研究施設を持ってくるとか、国家機関（3権の1つでも）を移転させるなどの思い切った施策が必要と書きました。今年の勉強会の中でAPUの方が別府の現状を例にとり、福島に大学を誘致するという案を述べておられたが全く同感です。福島の自助努力とばらまきの補助金だけではダメなのです。トップクラスの人材、多様な人材が土地に根をおろすことによって改善されていくことは多々あると思います。なによりそのことにより福島の価値を引っ張り上げることができるのではないのでしょうか。奇しくも3月11日生まれの私は、これからも東北に関わっていくことになります。